デルゲ川を歩く筆者。モンゴル観光のポスターに使われた。

フライフィッシング狂

③ 絶対に上げてやる。モンゴルの巨大魚

文・写真　戸出喜信
といでよしのぶ／洋画家／パリ在住
Yoshinobu Toide

2003年9月上旬。シャルル・ド・ゴール空港からベルリンを経由してチンギスハーン国際空港に降り立った。タイメンフィッシングの始まりである。

釣り仲間

今回のメンバーはジョルジュをガイドとしてフランス人5人と私である。WWF（世界自然保護基金）フランス会長であるクロードとは、以前にコラ半島で一緒だったことがあるが、他の3人とは今回が初めての釣行である。

ミッシェルと奥さんのナディンヌはパリの中心オペラ座界隈でかいカフェレストランのオーナーとのこと、そしてシャンタルはわけがわからないが富豪であるらしく、年に5、6回は海外遠征をするらしい私と同年輩の女性フィッシャーである。

人間社会ではそれぞれがたいした人格者らしいが、空港で自己紹介をしてからは、機内では外面とは全く違う表情で無邪気で底抜けに明るくて冗談と笑いが絶えなかった。

もうひとり、忘れていたが、私の親友の下瀬史嗣氏は30年ほど前にパリで日本人が経営する画廊に勤めていたころからの知り合いで、私に影響されて頻繁にセーヌ川上流部へ一緒に鱒釣りに通っていた。帰国後はほとんど釣りをしなくなったが、今回はウランバトールでおちあって参加した。

朝青龍

翌朝7人はウランバトールからヘリコプターで出発、目的の川のエグ川までは3時間の飛行だった。

我々の宿泊地はまだ建てて間もないような木の香りがプンプンする立派なログハウスで、シャワーありトイレは水洗で、その上サウナまであった。食堂に至ってはウランバトールの並みのレストランよりもはるかに高級っぽい。

人工的なものが何ひとつない雄大な周りの風景からしても場違いのような、立派なものである。

大男のバトォールの眼がうるんで、私もついもらい泣きである。離陸してだんだんと遠のく我々に、バトォールたちはいつまでも手を振っていた。

キャンプのスタッフ全員がモンゴル人で、ボスのバトォールは朝青龍並みのゴツイ顔つきの大男だ。初対面は取っつきづらい上に、どうも人見知りをするみたいで初日の我々の夕食のテーブルを遠巻きで見ていたが、ワインをすすめるうちに徐々に打ち解けて来て、午前0時を回るころには全員が入り乱れてのドンチャン騒ぎになってしまった。

連中が作ってくれるモンゴル料理は食あたりどころか旨過ぎて、これからの過酷なタイメンフィッシングのスタミナをカバーしてくれるには充分だった。

真冬にはマイナス40℃になるというこの高地は、9月上旬といえどもミゾレ交じりの冷たい雨や寒風が吹き荒れて、川は増水にササ濁りという悪条件であったが、最終日にどす黒い魚体に柿色の尾ビレが水飛沫と共に全身をあらわに跳んだ。

初めて見るタイメンは85㎝とまだ幼さが残るあどけない顔をしていた。ミッシェルも同サイズを釣った。クロードは120㎝クラスと結構長い時間やり合ったが、残念ながらばらしてしまった。私もメーター級を何匹かばらしたが、タイメンはアトランチック・サーモンと違ってよくばれる。相当慎重に渡り合わなければならないようだ。

ナディンヌやシャンタルの女性軍はレノックやグレーリング狙いで、これがまたよく釣れる。下瀬さんはタイメンを狙うには、もっと修行が必要のようであるが、彼にとってはこうして我々と一緒にいることが楽しくてしかたがないらしい。

銀世界

翌年もまた、バトォールたちに会いたいというのが正直なところで、同じ時期に同じメンバーでの釣行となった。

昨年とは打って変わって連日30℃を超える猛暑で、川も比べものにならないほどの透明度だった。バトォールたちは我々に釣らせようと懸命だったおかげで、私には1mを筆頭に4匹のタイメンを釣ることができた。

結局エグ川には3年連続で通ってしまった。

ヘリコプターが迎えにくる朝は一面の銀世界に急変して、この川の主大地に生きる彼らと、この川の主であるタイメンがこれから冬に向かってどう生き抜くのだろうと思うと、別れが辛かった。

大男のバトォールの眼がうるんで、私もついもらい泣きである。ヘリコプターが離陸してだんだんと遠のく我々に、バトォールたちはいつまでも手を振っていた。

このエグ川にもメーターオーバーはたしかにいる。

しかし訪れるフィッシャーが増え続けて毎週入れ代わりで同じ川を攻めたのでは、何10年も修羅場を生き抜いている聡明な巨魚には、しっかりとフライが見抜かれている。

そんな巨魚と出逢うには、まだ人が入っていない奥地の上流域を目指ざすしかなかった。そこで翌年6月、ジョルジュにクロード、そして下瀬さんと私の4人は、極東ハバロフスクからシベリアを目指した。

肉がない

アムール川に沿ってオンボロミニバスで20時間走り続け、その先はヘリコプターに乗り換えて、前人未到の川へと向かった。行く手の先にはどす黒い雲の中で稲妻が煌めいていた。相当の嵐である。イヤな予感がした。

案の定、上空から見えた目的の川は赤茶色の帯のように川幅一杯の濁流だった。川沿いをしばらく飛んだがヘリコプターが着陸できる河川敷を見つけることすらできなかった。

計画では川をボートで下り、テントで野営をしながらタイメンを狙うはずだった。そして一週間後にヘリコプターが迎えに来る手はずになっていたが、この濁流ではどうにもならない。撤退せざるを得なかった。

クロードはハバロフスクに戻るや否や「目的が果たせなかった。」とパリへ引き揚げてしまった。我々はここまで来てこのままで帰るのは惜しいと別の川へ行くことにした。

ところがこれがまたえらく遠くて丸一日車に揺られて、その上、木造りの小さなボートで川を遡ること8時間。馬力がない小型モーターは途中で何度もオーバーヒートをして、その度にモーターが冷えるのを待って、ようやくたどり着いたこの川の周辺はアムール・タイガーの生息地だと、着いてから聞かされた。

「奴らは捕えた獲物を隠す習性が